

坊農真弓 国立情報学研究所／総合研究大学院大学  
楠 房子 多摩美術大学

## 対談：「リレーコラム」を ふりかえって

### 「リレーコラム」はじまりの経緯

楠：お久しぶりです。お元気でしたか？

坊農：はい、おかげさまで。2月に無事出産し、徐々に仕事を始めています。

楠：お疲れ様です。突然ですが、ここ数年続いてきたリレーコラムが今回終わることになり、リレーコラムを始めたとき、会誌・出版担当理事をされていた坊農さんに、現理事の私がインタビューすることになりました。リレーコラムを始めたきっかけをお話いただけますか？

坊農：リレーコラムのきっかけは、それまで続いていた塚本前編集長肝いりの「会誌編集委員会女子部」の終了でした。「会誌編集委員会女子部」は編集委員の女性が持ち回りで、日々感じることを自由に記事にしてきました。しかし、掲載を続けて数年、世の中は女性だけではなく、ほかのマイノリティに目を向け始めており、ダイバーシティへの注目の高まりがありました。その結果、「会誌編集委員会女子部」は終了したわけです。ただ単に終了するのは寂しいので新しいコラムを開始しようという話になり、「笑っていいとも」のテレフォンショッキング形式のリレーコラムを開始することにしました。男性にも女性にも、情報処理まわりのことを好きに話してもらう場所を作ろうと思って。

楠：なるほど。そうすると最初の趣旨は会員、情報にかかわる方だったらどんなことでもいいので自由にエッセイ風にご自分の情報とのかかわりみたいなことをお話いただければいいかなという感じだったのですね。

坊農：そうですね。女子部を終わらせるなら、それまでそこで議論していたことの受け皿が必要だねと稲見編集長がおっしゃったんです。女子部は女性しか記事を書けないのが少々苦しくなってきた時期でもありました。執筆者によっては家庭内のこととか、赤裸々に書いていただいた人とかもいて、とても面白かったのですが、それだけで回すのは結構しんどかったです。

### 「リレーコラム」の展開

楠：最近ではいろいろと新しい方が入って来られて展開されていたように思うのですが、印象に残ったコラムとかはありましたか？

坊農：コラム記事というか、コラムの進め方が印象に残っています。近年 SNS が広まり、誰と誰とが友だちでどうい話をしているのか、うっすらと傍観できる世の中になりました。先ほども申し上げたように、リレーコラムは当初テレフォンショッキング形式を目指していました。電話のような線状的に繋がる深い友人関係を会誌を介して傍観するのは面白いんじゃないかと思ったんですね。実際に進めてみると、私の当初の思惑とは異なり、SNS だけで繋がっている方に回す方もいらっしゃいました。たとえば、SNS 上でやりとりはあるけれど、会ったことはない、魚を研究室で飼っている SNS 上の有名人に回すといった事例です。

楠：意外なところで接点があるんだなというのがちょっと見えて面白かったですね。リアルなつながりと記事のつながりというのがバランスがとれている場合もあるし、全然、会ったことがない方につないで、かえって面白くなったりとか、いろんな意外性がありましたね。

坊農：そうですね。そして最終的に最近掲載された2件は、女性の話になっています。結果的にダイバーシティなど、女子部が取り上げようとしていた話題になっている。

楠：なんか丸く。

坊農：そう。一周まわって戻ってきたなという印象をすごく持ちましたね。『情報処理』はほかの学会が発行している雑誌に比べると編集期間がとても短いんです。だからこそ、その時代時代とか、その時々で問題になっていることを取り上げられているというか、最前線を書いてもらえる媒体なのだろうなと実感しましたね。

## 編集のスピード感ととっつきやすさ

楠：事務局の後路さんの記事にありましたが、一昔前は郵送の執筆依頼で掲載まで時間がかかっていたのが、いまはスピードを持って編集が進められるようになりました。

坊農：私は一昔前の郵送やファックスで進めていた『情報処理』を知らないのですが、当時の会誌はオーソリティ（有名な先生）が本業の合間に自分の経験や知識を後進に伝えるために使う媒体だという認識で、プライベートなことを書くという風潮はなかったみたいです。郵送やファックスを使って編集していた時代には記事を書くこと自体が誉れ高いことだったんだらうと思います。しかしいまは、オンラインで記事が読める時代で、書く方や読む方だけでなく編集する方もかける時間が短くなりました。その分、記事の内容がフランクになっていきます。

楠：会誌自体も昔は学会に参加している先生方と研究室の方と企業の方という感じでしたけれども、今はもうジュニア会員もかなりの割合で読んでくれているので、層がすごく広がっていますね。なので、昔のようにただオーソリティが伝えるということでは全部のニーズをピックアップできなくなっている気がしますね。

坊農：今回リレーコラムをいったん打ち切りましょうとなったのは、すでにいろんな連載があるからというもの1つの理由ですね。

楠：そうですね。そして、いまも新しい企画がどんどん出てきています。IT紀行とか、積極的に取材に出て記事を書いていこうということですね。

坊農：なるほど。これまであまり取材には行ってなかったですもんね。

楠：どんどん外へ出て行って、より生き生きとした熱い記事を掲載しようと話しています。

坊農：リレーコラムだけではないのですけれども、会誌全体が分かりやすさとか、とっつきやすさの方にシフトしているというのは流れとしてありますね。

## 『情報処理』が目指す世の中の切り取り方

坊農：情報処理学会は会員が2万人もいて、すごく大きいですね。私が昔から入っている文系学会はそれに比べると本当に小さいのですが、その分専門に特化した

深掘り系の特集が組めるんです。その反面、『情報処理』は広く浅くを目指してもかまわなような小特集というカテゴリがあります。コラムもそっち寄りです。世の中を広く切り取った記事が多い印象です。そういう記事が書ける団体は余力があるというか、いろいろな視野を持つ人を集めることができている学会なんだと思います。

楠：情報技術自体が社会に向けているいろいろな貢献していくというフェーズに入りつつあるので、そういう記事がだんだん多くなってきているのかもしれないですね。

## 「ああ、この人、会ってみたい」

楠：今日はありがとうございました。最後にリレーコラム全体をふりかえって何かありましたらお願いします。

坊農：「会誌編集委員会女子部」の代替としてリレーコラムを始めてみて、かれこれ2年経ちました。そして最終的には、偶然ですけども、「会誌編集委員会女子部」が扱ってきたようなテーマに戻ってきています。執筆者をリレーさせて、執筆内容を指定しないやり方は、一種の「泳がせる」手法だったと思うのですが、その手法自体が社会のいろんなことをいろんな人がつながりながら語るという形に結びついたんだらうと思います。今回の対談にあたってリレーコラムをひと通り読み返してみたんですが、「ああ、この人、学会とかで会ってみたい」と思う執筆者がたくさんいましたね（笑）。なんだか、尖っているんですね。すごく色のはっきりした人たちに多種多様な記事を書いていただけて編集者としては満足しています。私のような感想を持った読者が一人でもいてくれたらなと思っています（笑）。

坊農真弓（正会員） bono@nii.ac.jp

2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。2009年より国立情報学研究所・総合研究大学院大学助教。2014年より同准教授。多人数インタラクション研究および手話・触手話・指点字を対象とした相互行為研究に従事。博士（学術）。

楠 房子（正会員） kusunoki@tamabi.ac.jp

1997年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。1997年多摩美術大学美術学部講師。2009年教授。教育学、CHI、情報デザインの研究に従事。博士（工学）。